

第3章

患者の行動とオピオイド乱用

[福井弥己郎：訳]

いつオピオイドを乱用する痛み行動を見つけるかが問題である。

Steven D. Passik, PhD, 痛みの心理学者, 緩和ケア専門医 (oral communication, 2004年3月)

ある人が、オピオイド依存になっていたりオピオイド系薬物を乱用していたりするかどうかは、X線検査でも、診断検査でも知ることはできない。現在まで、薬物が悪用されていないかどうかについてのスクリーニングに、臨床家が唯一使っている方法は、患者の痛み行動を観察し、痛み行動から推察し、患者の痛みを理解することである。それをきっちりと行うことが難しいのは、BurglassとShaffer¹による次の文章に示されている。

「ある薬物を、他人から見て確かな理由と考えられる方法と、そうでない理由と考えられる方法の、両方の方法で使用する人がいる。」

曖昧な表現であるのは、薬物に関連して異常行動をとる患者の動機には、様々な状況や生活、社会環境が影響しており、薬物中毒は、そのうちのほんの一部であり、臨床的に判断するのが難しいと考えられるからである。オピオイドによる痛み治療をうまく成功させるには、処方箋を誤用しないように管理する必要がある。この処方箋の管理を行うには、患者の薬物関連異常行動をモニターし、記録し、対処する必要がある。オピオイドによる治療が、管理不能な問題の原因となることを防止して、患者にとって有益な治療にすることが目標である。

薬物関連異常行動のタイプ

ある種の患者の痛み行動は、オピオイドによる治療を施行するのに問題があることを示すものであると、一般に考えられている。広い意味では、異常行動とは、薬物治療に関連して、治療計画から逸脱するものすべてのことである。薬物関連異常行動のいくつかの例を以下に示す。なお、以下のものは重要度の順に示したものではない^{2,3}：

- ・認めていない用量増加を1回行った。
- ・認めていない用量増加を2回以上行った。

第4章

オピオイド乱用のためのリスク因子

[山口重樹：訳]

“患者がどのような病気を患っているのか知ることより、どのような患者が病気を患うのかを知ることが重要である”

—William Osler, 医師 ジョンズ・ホプキンス病院 前教授/診療部長¹

結局のところ、痛みを有する人たちの中で、ある特定数の人たちが薬物乱用あるいは依存の徴候を示す。しかし、すべての患者が乱用あるいは依存に対し同じリスクを持っているわけではない。この章では、なぜ一部の患者が他の患者と比べ、より依存に対し脆弱であるか、その理由を理解するために、薬物乱用のリスク因子について述べる。1つの種類の物質乱用者は、他の種類の依存物質にも乱用のリスクも持っているため、アルコール、麻薬などの非合法薬物や処方オピオイドの不正使用についても検証されている。また、乱用者のリスクの特徴には、しばしば精神疾患あるいは複数の薬物乱用のような合併症が含まれる。それらの因子には、相互が関わり合い、強化されていく様子が示される。

薬物乱用にいたる個々のリスク因子

一般的に、慢性痛の治療のために処方されたオピオイドを乱用する可能性はすべての患者で等しいと誤解されている。オピオイド処方、サイコロでゲームをするように、患者がゲームに勝ってより良い生活を手に入れるか、ゲームに負けて依存に陥って幸せな生活を失うか、といったギャンブルのように考えられている。しかしながら、科学的なエビデンスによってこのような考え方には異議が唱えられている。実際、患者のオピオイド乱用のリスクを高めるような疑う余地のないリスク因子についての裏付けがある。患者がこれらの因子を持っているかどうかを事前に知ることは、臨床医がその治療過程をモニターしていく手助けとなる。

文献や臨床経験から収集されたオピオイド乱用のリスク因子には次のようなものがある：

- ・薬物乱用の既往²。
- ・薬物乱用の家族歴²。
- ・若年である²。
- ・思春期直前の性的虐待歴²。